23

神の律法

1．行い契約の時に与えられた律法は、何ですか。

神は人を神の形に造られたとき、人の心に道徳法をみずから刻んで置きました。そして、善悪を知るようにさせる木の実を食べてはならないと、戒めを与えますが、それは、心に刻まれてある道徳法を守るのかどうか、その良し悪しを確認するためのものでした。勿論、神さまは、アダムとエバに道徳法と戒めを守れる力も与えたので、彼らに、道徳法は勿論で、善悪の知識の木の実を食べてはならないと命じたのでした。アダムとエバは、道徳法と戒めに従順することで、神の民であることが証しされ、神は、彼らの神であることが示すためでした。そのことを、行い契約と呼びます。従って神は、ご自身の民と契約を結びながら、道徳法、また律法を守りなさいと命令なさったのは、神の主権的恵みです。それを通して、神の契約的愛を示し、その民の特性が表われるようにしようとのことでした。

2．モーセ以前の恵み契約の時にあった、律法、また自然法とは何ですか。

アダムは神と結ばれた行い契約を犯したことで堕落しました。つまり、アダムが戒めと道徳法を破り、神との契約を壊してしまいました。それでアダムの

堕落以降に、その腰から出て来る、すべての人類は、行い契約の下に置かれるようになりました。つまり、アダムの子孫である人類は、律法を守って自分を救われようとしますが、アダムが堕落しながらすべての力を失ってしまったので、自分の力で律法を守って救われることができなくなりました。それで神は、堕落したアダムに、恵み契約を提供してあげました（創 3:15）。律法の行為によっては自分を救うことができないと悟った者は、恵み契約をつかみ、頼るようになさったのです（ガラテヤ 2:16）。

このように恵み契約が与えられますが、律法は、アダムの堕落以降にも、人々の心に残っていて続けて義の規則となりました。エノクは心にある道徳法、また自然法を守ることで神と同行しました（創 5:24）。ノアは神の戒めとすべての命令に従いました（創 6:22）。アブラムは神から、御前に歩み、全き者であれ、という命令を受けますが、それは、心の中に記された律法を守ることでした（創 17:1）。ヨセフも、道徳法、また神の律法を守ろうと必死でした（創 39:9）。つまり、モーセ以前にも、恵み契約の下にいても、心に刻まれた道徳法と自然法は相変わらず有効で、契約関係にあった神の民は、律法を守って、それを犯すまいとして、霊的な注意に向けたのです。

３．モーセを通してシナイ山において、与えられた律法は何ですか。

神がモーセと結ばれたシナイ山での契約は、恵み契約です。イスラエルは、神の約束と契約によってエジプトから救われました。神はイスラエルとシナイ山で契約を結びますが、神が、彼らを救った方であることを明確にし、イスラエルは、それからモーセを通して律法を受け、その律法を守り行うことで契約の民であることを明らかに示すべきでした（出 19:1–25）。その時の律法、また道徳法は、アダムの心に記させたものを、今度は、石の板に直接、神が書き記し

て渡すものでした（申 10:4）。

神がイスラエルに律法を与えたのは、律法を守って自分を救いなさいということではありませんでした。神によって贖われた民は律法を守って、神が彼らの神であること、自分たちは神の契約の民であることを世に見せなさいということでした。従って、モーセを通してイスラエルが神と結ばれた契約は、行い契約ではなく、恵み契約なのです。また、契約の民として、神の御心である律法を守り行うことには、宣教的目的も含まれていました。神を知らない異邦の民族に、神を知らせようとする道具だったのです（申 4:1–8）。

4．恵み契約である、新しい契約から、与えられた律法は、何ですか。

神は、捕虜期にも預言者たちを通して、新しい契約について約束なさいました。新しい契約は、モーセに与えた契約と比較する点で、新しい契約と呼ばれます。両方とも同じく恵み契約です。ところが、新しい契約には、キリストの血潮を通して神の民になれることを語ります。つまり、キリストの血を信じることで神との契約関係が結ばれますが、この時、聖霊さまが信じる者たちの心の中に律法を書き記します（エレミヤ 31:33、エゼキエル 36:27）。神がこのようになさる理由と目的は、キリストの血潮によって恩徳を受ける信者に、律法、また道徳法を守らせて、彼らが神の民であることと、神が彼らの神であることを示そうとのことです（エゼキエル 36:28）。従って、神の契約と契約の民は、道徳法を守ることが、不可分の関係です。

5．キリストが律法を終わらせたので、律法は廃止されたのではありませんか。

キリストは人間の体を着てこの地に来られ、律法のすべての条項を履行され、儀式法と市民法まで守り通しました。このように人間の体を着て律法を完全に

守られたのは義を確保して、信じる者たちに義を転嫁させるためでした。儀式法はキリストを予表するものとして、福音の恵みに対する影でした(ヘブル 10:1)。従ってキリストが贖罪の犠牲として、それを成就させたので、それ以上有効ではありません。また市民法は、ユダヤ共同体の公共の利益のだめのものだったので、今はそれ以上、文字的に適用されません。

しかし道徳法は、神に対する私たちの義務と、人に対する義務を指示することとして、敬虔と完全さを求める神の命令と基準なので、やはり有効です。それは、永遠の王である神に従順することは、すべての世代に与えられた法です(ヤコブ 2:8)。つまり、キリストが律法を成就したことで、儀式法と市民法はそれ以上有効ではありませんが、道徳法は、むしろ、さらに強化されました（マタイ 5:17-19、ヤコブ 2:8、ロマ 3:31）。

6．福音が律法に置き換えられたのでは、ありませんか。

違います。福音を従順の規則、信仰の規則と呼びます。ところが、律法は従順を求め（ヤコブ 2:8）福音は、律法を真実に行うことを指示します（1 テモテ 1:9-11、エペソ 4:20-21）。従って、福音が律法に置き換えられたのではありません。さらに福音が、律法の概念からさらに追加されたのはありません。つまり、キリストに対する信仰を持つ者は、ある新しい福音の規則が必要なのではなく、律法が、彼らの救いに対する感謝生活の規則として必要なことです。新生していない者には、律法が彼らを殺す文字ですが（Ⅱコリント 3:6）。新生した者には自由の律法です（ヤコブ 1:25, 2:12）。まことの福音と、救いの恩徳を知るためには、必ず律法が必要です。従って、福音が律法に置き換えられたのではありません。

7．律法の属性は、何ですか。

律法は、聖・義・善（ロマ 7:12, 16）霊的なものであり（ロマ 7:14）完全です（詩 19:7）。律法には、神の聖・義・善なる属性が、そのまま反映されています。従って、神の属性と言える律法を私たちにこのように与えたのは、私たちを抑え、圧制するためではなく、徹底して、私たちの益のために与えられたことと知ることができます。それゆえ、新生した霊魂には、神の律法が重荷ではありません。無理やり守らなければならないのではなく、神を愛しているゆえに、楽しみながら守ることです（1 ヨハネ 5:1-3）。

さらに律法の霊的な属性は、私たちの霊魂に直接近づき、私たちの心と考えと体に力を行使します（申 6:5、マタイ 22:37、マルコ 12:30、ルカ 10:27）。律法は私たちに神の御心を知らせます。私たちの義務を知らせます。そして善悪を分別できるように判断力も与え、何が、神を喜ばせることなのかを知るようにします。そして私たちの情緒に影響を与えて、神の喜ばれることを好むようにさせます。律法の完全性は、その律法を楽しみ、主の恵みの中で、完全に守ろうと努力する者に、敬虔にさせてくれます。

８．新生していない者に聞かせる、律法が持つ、伝道的機能は何ですか。

律法は、新生していない者に、自分の汚れを見るようにさせ、罪を悟らせる鏡と同じです。その罪には、神の審判があることを知るようにさせます（ガラテヤ 3:24、ロマ 3:20, 27）。律法は、自分の悲惨な状態を感じさせ、罪がどれほど充満なのかを知るようにさせます。そして、自分自身が律法を守って自分を義とすることができないことを悟らせます。ところが、新生していない者がこのような律法の機能を通して、キリストに出て行くまでは、聖霊の御業が必要です。なぜなら、罪に対する覚醒があったとしても、一時的で終わってしまう場合が多いからです（使徒 24:25）。

９．新生した者にとっての、律法の機能は何ですか。

律法は新生した者に、彼が持っている罪を明らかにし、悟らせ、悔い改めさせます。また律法は、光のように信者を導く機能をします（詩 119:105）。信者だと言っても、この世の暗闇の中で、たやすく目が暗くなり、闇の中に入って行くからです。それゆえ信者は、毎日、主の律法を黙想し、律法を心に入れ留まらせなければなりません。

律法は、信者たちに従順できるように挑戦させる役割をします。神がそのように命令なさったからです。また律法は、信者を謙遜にさせます。信者だと言っても律法を完全に全うするには、自分はあまりにも弱くて、遠くにいると考えるからです。従って信者が、神の律法を一層深く悟るなら、その用度は大変、大きいです。信者は、律法を真実に行う中で、さらに主に似ている自分を発見するようになるでしょう。

10. 最後の審判の日に、律法は、どんな機能をしますか。

すべての人は、律法に従って審判を受けるようになっています。しかし人々は、行い契約の中にいる者と、恵み契約の中にいる者との区分は、ハッキリ表れるでしょう。キリストを救い主として頼らずに、自分の行為に依存する、行い契約の中にいた者たちは、彼らの行為が、律法と一致しなかったり、律法が求めたことを履行できなかったことがハッキリ表れるでしょう。それで彼らは、罪に定められ、永遠の審判に処罰されるでしょう。勿論、行為契約の下にいた者たちの中には、自分は神の律法を知らなかったと言い訳を言う者もいるでしょうが、彼らにも自然法があったので、その言い訳は無駄になります（ロマ 2:15）。行為契約の下にいた者には、ただ憐みのない審判だけがあるのです。

一方で、ただキリストを救い主として受け入れ、その救いの恩徳を頼りとし、恵み契約の下にいた者たちも、律法に従って彼らの行為も判断されますが（マタイ 25:35、黙 20:13）、彼らの律法は自由の律法です。つまり、キリスト者の行いも、律法と戒めによって判断されますが、その判断は、彼らの行為が、信仰に根拠したものなのか、どうなのかによって判断されます。ましてや、弱さのゆえ、その行為が不足で欠陥があったとしても、キリストの恩徳に頼って行ったのなら、罪の定めには至らないです。そのことを、自由の律法によって審判を受けると言います（ヤコブ 2:12）。

従って、終わりの日の審判の時、律法が、私たちの信仰の行為などを判断するから、信者はこの地において、罪を犯した時、すぐに悔い改め、律法を破らないように、罪を犯さないように、さらに自分を低くしなければなりません。また、積極的に自分の霊的無能と不足を認め、主の恵みを頼り、律法を完全に守ろうと、ますます力の限り努力しなければなりません。つまり、信者は、律法の厳重な審判は受けないとしても、律法全体を守ろうと努力すべきです。これこそ、聖徒の聖なる義務です。

11. 救いの民は、律法を守って義と認められるのではないので律法を守る義務がないという主張は、何ですか。

道徳律廃棄論者は、律法を守って救われるのではないので、救いを受けた以降は、律法を守る必要がないと主張します。さらに彼らは、救われた者が律法を守り行うのは律法主義だと批判します。道徳律廃棄論主義は、律法に対する聖書の教理に無知な者たちです。彼らは、律法が罪に対して叱責の機能と、信者の聖化の手段となる機能を持っていることを分からないだけでなく、反対する者たちです。彼らは、神の贖いの目的も理解できない者たちです。結局、道徳律廃棄論者は聖化を反対する者です。予定論を極端に解釈して「選ばれた者は聖化がなくても救われる」と主張するだけでなく、聖化を選択事項に置いて「義認だけでも救われる」と主張する者がいますが、それはすべて誤りです。